

2016 年度第 1 回物学研究会レポート

「植物がもたらす、次世代への可能性」

西畠清順 氏

(プラントハンター)

2016 年 4 月 18 日

こんな時代だからこそ、逆にどれだけ有機的な世の中のできるか——企業として、個人として、そういう発想がますます大切になってくるこの時代に、いま植物を使ったプロジェクトが注目を浴びています。

2012年、「ひとの心に植物を植える活動」として立ち上がった、そら植物園は、さまざまな緑化事業や街づくり、空間づくりだけでなく、植物を用いた多様なプロジェクトを手がけています。「共存」をテーマに世界各国を代表する植物が都心に仲良く暮らす代々木ヴィレッジの庭園をはじめ、台湾の麗寶樂園や、シンガポールのガーデンズ・バイ・ザ・ベイ、ルイ・ヴィトンやシルク・ド・ソレイユなどの世界的な企業とのプロジェクト、そして日本一の里山である出身地の兵庫県川西市の20ヘクタールに及ぶ集合都市開発に街づくり大使として尽力。現在手がけているプロジェクトは国内外で100ほどになります。

なぜ、そら植物園にこれほど多数のプロジェクトが寄せられるのでしょうか。いま求められている植物の可能性を信じてやまない西島清順さんが、ご自身の植物思想とともに体験や事例をシェアしてくださいました。以下、サマリーです。

「植物がもたらす、次世代への可能性」

西島清順氏

(プラントハンター)



01：西島清順氏

(関)

2016年度は、「パラドックス」をテーマにデザインについて考えます。その第1回目には、昨年からお声がけし、ようやくおいでいただいたプラントハンターの西島清順さんです。

(西島氏)

ご紹介いただいたように、僕はデザイナーでもアーティストでもなく、植物屋です。国内外の企業や団体、政府といったさまざまなジャンルの方々から、植物とコラボレーションして何かできないかと相談を受け、いろいろなプロジェクトをやらせていただいています。今日は、植物を使ってこんなことができるといったことをお話できればと思います。

■そら植物園のプロジェクト

僕は兵庫県出身で、21歳のときに家業であり、明治元年から続く植物卸問屋「花宇」に入社しました。営業として10年間、植物を卸す業務を行っていましたが、2012年、東京の代々木ヴィレッジに、「そら植物園」という事務所を構え、自分の名前を公表して活動し始めました。そして、「植物で何かやりたい」と思う人たちとさまざまなプロジェクトを手掛けています。

最近の事例をいくつか紹介しましょう。4月15日にオープンした、JR 恵比寿駅の駅ビルアトレの屋上庭園です。アトレさんは「日常」をコンセプトにした店舗なので、屋上庭園は非日常的で少しゆったりした気持ちになれる場所ということで、「日常 x 非日常」をコンセプトにしました。

撮影用に植物の貸し出しも行っています。最近では綾瀬はるかさん主演のNHK初の大河ファンタジー『精霊の守り人』のタイトルバックや、三代目 J Soul Brothers のプロモーションビデオなどがあります。

植物を使った空間づくりも行います。例えば、NYのアパレルブランド、「フィリップリム」の10周年記念イベントでは、「瞬間」を表現するために早咲きと遅咲きの桜、そして中間咲の桜という3種類を集め、開花調整によってすべてを満開にした状態で店内を埋め尽くしました。

また、シンガポール政府の依頼で、日本との国交50周年を記念して、現地の人気植物園、「ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ」で満開の桜の花見イベントを行いました。日本から大量の桜を輸出しましたが、連日、大勢の人に来場いただきました。

山口県の常盤公園の再生工事は進行中で、100ヘクタールの植物園用に世界中から植物を集めているところです。

変わった事例では今、染色染め作家の人間国宝、志村ふくみさんと、世界のさまざまな文化を染めてきた色を草木染めによって発見するというプロジェクトに取り組んでいます。例えば、僕が紛争地の砂漠から獲ってきた植物で染めてもらったら、すごくきれいな色が出て感動しました。

こうしたプロジェクトを実現させるために、僕はとにかく旅をしています。世界を旅して、いろいろな植物素材に出会い、正式な許可をとって安全な方法で運んできた植物をいろいろな事例につなげていきます。具体的には切り崩された碎石の山から活け花用の植物を獲ったり、未知の観葉植物を海外に探しにいたり、旅の途中で出会った珍しい景色を発想の種にしたりしています。

こうした仕事は「プラントハンター」と呼ばれます。300年ほど前からある伝統的な職業で、特にヨーロッパで貴族や王族のために珍しい植物を求めて世界を旅し、花や種を持ち帰ります。歴史上の著名人にはシーボルトがいます。日本から多くの植物をヨーロッパに持ち

帰り、革命を起こしたと言われ、彼の名前を残そうと「シーボルティ」という学名の植物がたくさんあります。一方で、イタドリのように、彼が持ち帰った植物の中には雑草となって帰化し、大繁殖している植物もあります。この話はまた後でしましょう。

現在の日本では、庭園や街路樹、花屋など見かける植物の95%は流通にのった規格化された商品です。問屋にファックスを1枚送れば、オンラインショップでクリック一つすれば、誰でも手に入ります。僕が勝負するのは、流通にのらない数パーセントのところ、他社が取り扱っていない植物です。

歴史上、プラントハンターは世界を変えてきました。例えば、コロンブスが穀物を持ち帰らなかったら、いったい何人が飢え死にしたでしょう。あるいは、ヨーロッパにひまわりの種が持ち込まれなかったら、ゴッホの『ひまわり』は生まれていなかったでしょう。さまざまな芸術や文化の背景にはすべて、ローカル、あるいは外来の植物があります。

昔は食料や薬になる有用植物が中心でしたが、物も十分にある豊かな今、プラントハンターとして僕は、植物を運ぶことでいろいろな気づきを与えたり、面白いコンテンツになって人が注目することでムーブメントを起こす、といったことを意識しています。

現在は年間200トンほどの植物を輸出入しています。枯れた枝を輸入することもあれば、蘇鉄の種をグアテマラに輸出し、苗に育ったら輸入して日本で販売する事業も行っています。日本の植木屋が捨てるような植物が海外では売れたりするなど、価値は場所によって変わります。

僕の基地は兵庫県川西市にあります。国内外から集めた植物が常時3000種類ほどあり、熱帯植物や砂漠植物など気候帯に合わせた温室ですべて自社管理しています。畑でもいろいろな植物を育てています。

■そら植物園とは

ここまで一気に話しましたが、何か質問があれば、どうぞ。

——プロジェクトで使った植物は、終わったら回収するのですか？

それぞれですね。切ってしまったものは1回限りですが、長期間の展示では生きたまま使うので、回収することもあります。植物は依頼があってから適した素材を探す場合と、素材ありきで企画する場合もあります。

事務所は代々木ヴィレッジにあります。「共存」をテーマに世界各地の植物を集めた施設で、レストランやカフェなどがあり、ビアガーデンが行われる夏にはひと月に6万人が来場する人気の施設です。植物を集客装置にしたビジネスモデルの第1弾です。今年5月には、「そら植物園インフォメーション&カフェ」もオープンします。うちのサロン的な場所で、お茶を飲みながらプロジェクトやイベント情報を見ていただけます。

植物屋としては、企画力だけでなく、資材力があるかも重要で、うちは日本で一番の在庫量だと思います。僕は20代で植物調達能力を磨き、今はそれを発揮しています。茶室用の小さな植物から何トンもある大きな植物のオペレーションまで手がけていますし、不可能と言われるような植物の移植もいろいろ成功させています。

こうした仕事をやるうえで、僕のベースとなっているのは活け花で、昔から活け花の家元を相手に商売をしてきました。活け花は、「生きる」に花と書くこともありますが、本来は「活かす」に花です。活け花は植物を殺すことから始まる芸術で、僕も素材の調達を依頼され、これまで多くの植物を殺してきましたが、今は活かすことを信念にしています。食物や衣服など人間の生活すべてが植物によって成り立っているわけで、殺すことが人間の生きる術であるなら、活かすことを大切にすべきだと思うのです。

「活かす」を意識した事例を紹介します。ヨーロッパ各地にはオリーブ農場があり、食用やオイルにしますが、古くなって実を結ばなくなった木は植え替えられてしまいます。こうした古木を活かそうと、日本に輸入することにしました。

写真は樹齢1000年で幹周約6mというオリーブの巨木の移送に初挑戦したときのものです。日本の検疫は厳しいので土をきれいに洗い流し、人工用土で根を養生し、枝もある程度切り落としてからコンテナに入れ、約1カ月の船旅で運びました。たまたま納期が2011年3月の東日本大震災後だったので、納品先で神道式による植樹式も行いました。

納品先は小豆島。オリーブ栽培を始めてちょうど100周年の記念でした。長年オリーブで町興ししてきたものの、最近は九州におされていることもあり、地元企業などが島の再活性化を願い、このオリーブの木を植樹しました。翌年には芽が出て、2年目には500個の実がなり、その翌年には一万個に増えました。樹齢1000年で役目を終えたはずのオリーブの古木が、遠い国まで旅してきたら若返ったのです。

——植物の価格はどう決まるのですか？

植物にも相場があり、プロジェクトを依頼されるタイミングによって使う素材や規模は雲泥の差です。だから、予算に合わせてその時点でベストな内容を用意するようにしています。

例えば、日本の相場では、オリーブは樹齢約60年で電信柱ほどのサイズが最大級で、それでも数100万円します。これが黒松だと樹齢200年、幹周3mで数千万円です。先ほどの樹齢1000年のオリーブは約1000万円なので格安です。僕が海外から買い付けることで相場を破れば、クライアントにはメリットが高い。だから、引き合いはたくさんあります。でも、僕はただ売るのではなく、クライアントの話を聞いて、「いい企画だな」とか「今しかない」と判断した内容を優先しています。

■ プラントハンターという仕事

そら植物園は問屋であり、基本は手配や調達です。だから、プロジェクトのすべてを自社で完結しないことがポリシーです。コンサル業務も行ってはいますが、仕事を相談されたら、適したデザイナーや地元の庭師さんなどとコラボするようにしています。植物業界もいろいろな専門家がいるので立場を飛び越えて商売をするのではなく、そら植物園に頼めば、必ず他の植物屋も潤うという仕組みをつくっています。植物界では今までなかった試みだと思えます。

最近の事例では、能登の加賀屋旅館が新たに買った旅館の日本庭園のリノベーションがあります。現場は能登ですが、当社は兵庫で、事務所は東京なので、コスト削減も兼ねて僕がディレクションし、地元の職人さんに依頼しました。

最近はなんでも、「地元のものを使えばOK」という風潮があり、提案も通りやすかったりしますが、大事なことを曇らせることもあるので僕は慎重に検討します。加賀屋の案件は地元の素材を使うほうが絶対にいいと判断しました。地元で自生する松や加賀屋会長宅の庭に生えていた松を植樹して、「1枚の絵」をイメージさせる庭を造ったのですが、低コストで美しく完成した事例となりました。

——植物の買い付け先はどのようなところですか？

仕入れ先はバラエティに富んでいて、海外の農家や問屋、植物ブローカーなどです。プラントハンターといっても、勝手に植物を掘って持ち帰ることはできず、現地での調査や交渉、許可の取得などが必要であり、各国の業者との協力体制は不可欠です。

——そもそも、プラントハンターになったきっかけは？

きっかけとしては、家業が花の卸問屋だったというのが大きいです。実は21歳まで植物に一切興味がなく、桜と梅の区別さえつかず、恥ずかしい思いもたくさんしましたが、ものすごく強烈な出来事によって興味をもつようになりました。21歳のとき、ボルネオを旅行し、標高4000mを超えるキナバル山に登った時のことです。

気温は100mごとに0.6度下がります。つまり、キナバル山は、ふもとは熱帯気候なのに、途中で亜熱帯気候になり、温帯になり、最後は亜寒帯になるという地球上の気候が全部凝縮されていた。同時に標高によって植物も劇的に変化して感動したし、世界一巨大な食虫植物にも出くわして、こんなすごいものが土から出てくるなんてと本当に驚いたんです。しかも、それが雲の上。そんなシチュエーションも手伝って、僕のなかで何かがプチッと弾けた。「植物ってすごい」。それからは、まるで魔法にかかったように、植物のことが気になるようになり、好きになりました。植物屋の僕的な言い方でいうと、「植物モノゴコロ」がついたんです。

——商売として、こういう展開のきっかけになったのは？

う～ん、その答えは難しいですが、やはり、「貯め」かなと思います。僕は20代から卸業

者という裏方として仕事をしてきて、表側にいる家元たちは意外に花のことを知らないと感じました。ファックス 1 枚で花を仕入れればいいので、それでも大丈夫なんです。そういうなかで、僕はどうしたら成功できるかとずっと考えていましたが、20 代の頃は一切表にでないようにして取材も受けませんでした。「僕が切った枝だ」と言いたいときもありましたが、ずっと我慢して貯めました。

そうして 10 年が経ち 30 歳になったとき、父が社長でしたが、会社が傾いたという事情もあり、いよいよ表に出ることにしました。それで、2012 年に名前を公表し、そら植物園を立ち上げ、取材も受けるようにしました。最初は小さな取材記事でしたが、その後はあらゆるメディアからオファーがあり、有名なテレビ番組にも出演しました。植物特集をする雑誌の数も劇的に増えたと言われました。でも、もし、貯めた期間が 10 年でなく 5 年だったら、ここまでなっていなかったように思います。自分の実力もそうだし、世の中のタイミングも。

——活け花の先生との関係はいかがですか？ 例えば、活け花は枝ぶりも重要ですが、それは西島さんが納品したものですよね。

そうなんです。作品の出来は切り手である僕らの力による、ということは絶対に言えませんが…。言え、先生にものすごく煙たがられます（笑）。

数年前に金沢 21 世紀美術館で行われた、全国の家元による展覧会「日本いけばな芸術特別企画」で講演をしたのですが、僕は生意気にも、「華道界は今の状態なら未来は危ない。飾るだけで、植物のことを何にも知らないから」と話してしまった。すると、とても嫌われ、会社もつぶれかけました。その後、1 人、また 1 人と戻ってきてくれましたが。

また、毎年春に日本最大の活け花イベントを開催している日本橋タカシマヤは華道界にとっての聖地で、これまでは三大流派の草月流、小原流、池坊の家元だけが展示できるという暗黙の了解がありました。ところが、なんと去年、僕にも声がかかり、ステージをジャングルのような植物園にしました。当然、華道界の人たちは驚いたと思います。

でも、最近はその家元たちも、「また一緒にやれたらいいね」と言ってくれるようになりました。表に出始めた頃は潰されそうになったし、ここまでくるのに時間もかかり、僕自身も「もういいや」と思うときもありましたが、ようやく華道界の人たちにも溶け込めてきたのかなと感じています。

——我々デザイナーは問題解決の手法としてデザインをしています。西島さんは「植物のチカラ」を使って自己表現しながら、世の中にない価値観を投げかけて問題提起する側だと感じました。一方で、ビジネスマンとして裏方に徹する立場もあるように思いますが、そちらの立場の達成感はどこにあるのでしょうか？

僕個人としては、達成感は毎秒感じています。大好きな植物で仕事ができているし、顧客が求める植物を無事に運んで納めたとき、喜んでもらったとき、今まで見向きもしなかった人が「植物大好き」と言ってくれたとき……。すべてに達成感があります。

そら植物園を立ち上げたのは正直なところ、自分が食べていくためです。でも、やればやるほど大きなものが返ってくるので最近欲が出て、植物は社会に対して何ができるだろう、自分の仕事が社会のために役に立ったらいいなと思うようになってきました。大好きなことがメッセージになればと、僕が今、目指しているのはそこです。

僕はデザインのことはあまり分かりませんが、石器時代がデザインの始まりで、デザインという言葉は紀元前 2500 年くらいにできたとすれば、では植物の誕生はいつでしょう？諸説ありますが、約 45 億年前に海で生命が生れ、競争が増えたので川に逃げ、そして陸に上って原生林をつくったのが約 4 億 5 千年前です。

デザインや宗教の歴史に比べたら、植物には圧倒的に長い歴史があるし、植物があったから人間の暮らしが成り立ってきました。詳しくは、著書の『教えてくれたのは、植物でした～人生を花やかにするヒント』をぜひ読んでいただければと思いますが、もっと多くの方が植物のチカラに気づき、何か面白いことができないかと考えて、僕に発注してくれたらと思います。

今日用意してきた事例はまだほとんど話せていませんが、さすがデザイナーさんと思える、面白い質問が多いので、このまま続けたいと思います。

——西島さんご自身のブランディングがしっかりしていると思いました。私はあまりテレビを見ませんが、「プラントハンター」という言葉を聞いただけで顔が思い浮かぶくらい、強烈な印象が残っていたのですが、プロデュースされている影武者がいるのでしょうか？

残念ながら、自分一人でやっています。すごいパトロンがいるわけでもない。お話をいただくこともあります。ただ、「プラントハンター」という名前をつけてくれたのは、あるウェブデザイナーです。10 年前、僕の仕事が面白いのでブログを書いてみたらとアドバイスしてくれて、つくってくれたブログサイトのタイトルが、「プラントハンター」だったんです。

「なんか大きく出たな」と感じたものの、個人のブログだし、そろそろ表に出ていこうと思っていたので、まあいいかと。書き始めたら、人生がものすごく変わりだしました。プラントハンターという言葉の強さと活動のリアリティさがたぶん化学反応を起こしたのでしょう。いろいろな声がかかるようになった。それがすべてです。

■ プラントハンターとしてめざすこと

——西島さんが関わられた大崎パークシティは好評で、予定より早く完売したと聞きました。都市の緑化についてはどうお考えですか？

大崎パークシティは約 3 ヘクタールの都市開発で、僕にとって去年の案件では一番大きなものでした。三井不動産グループと複数のゼネコンなどが 20 年かけて設計してきたプロジェクトで、僕に声がかかったのは残り 3 年の時点、2012 年でしたが、僕は一から見直しました。

オーガニックシティというコンセプトを提案し、その考えのもとで街をブランディングしたのです。

成功の理由はすごく簡単で、何がウリかを明確にしたことです。マンションだけでなく街全体を変えようと、敷地内にある7つの広場に、「オアシス」「コミュニティを生む広場」などそれぞれストーリーをもたせました。また、そもそも街路樹がすべて同じ種類の木で、高さもピッチも同じで並ぶのはおかしいのではないかと。そこから変えようと提案したところ、最初は、「前例がない」と言われましたが、「前例は、どの視点から見るかで変わるし、海外にはある事例。それに、元々自然はバラバラだから、オーガニックシティというコンセプトを体現するならバラバラでいいはず」と突っぱね、結果的に大崎の街路樹は一本一本種類も樹齢も高さなども異なる植栽になりました。大崎を散歩する機会があれば、ぜひ見てください。

今の時代にはブランディングやストーリーが必要です。なぜこの木がここにあるのか、なぜこの花が必要だったのかなどストーリーを紡ぎ出し、それに植物で応えていくとどんな大人にも絶対に響く。僕はそう思ってやってきて、大崎の事例はそれが顕著にでた事例だと思います。

——加賀屋旅館の事例で、必ずしも地元のものを使えばいいのではないという話がありました。では、どういった場合に地元のものを使おうと判断されるのでしょうか？

たしかに最近では、ディベロッパーの計画に対し、コンサル会社が「地元のもので」と提案する傾向があると感じます。でも、植物について考えると、日本が海外から植物を取り入れて1500年ほどですが、食物の95%は外来種だし、公園の植栽はほとんどが輸入植物です。「日本古来のものじゃなければ」と力んで主張するのはどうかなと思います。

かといって、コピー大国でもないのに、「何が日本らしさか」と考えることは大切です。例えば、アメリカ人を招いたある茶会で、日本のフヨウでなく、アメリカフヨウが飾られました。洋種の植物を使ってはいっても招待客を考慮したわけで、それこそ日本的な「和のおもてなし」だと僕は思います。元々日本にあるものと、外から取り入れたものをうまく合わせる。そういう日本文化の表現もいいと思います。

——近年、外来種による生態系の破壊も問題になっています。植物を扱う方として、西畠さんはそんな現状についてどのように思っていますか？

ぜひしてもらいたかった、いい質問です。たしかに日本では外来の野菜や観葉植物が帰化し、生態系を変えている種もあります。では、一番繁殖している種は何でしょう？実は畜産家が穀物や牧草を輸入したときに一緒に入ってきた植物で、ほとんどが一年草です。

植物が輸入され始めた頃の、検疫がそれほど厳しくなかった時代のことですが、植物の歴史から見たら、ほんのわずかな1500年間で爆発的に増えてしまったわけです。牧草を輸入した人を悪く言うのは簡単だけど、今はこの事実を前提に今後は何をすべきかを考えることが大事だと思います。毎日大量の植物が輸出入されるなか、そら植物園はせいぜい年間200

トン。本当に小さな規模だし実績だから、生態系がどうのと話せる立場ではありません。でも今後、皆さんがデザインされるなかで生態系などを考えるときがあれば、そんな前提も考慮してもらえたらと思います。

■黒川代表と意見を交換

——黒川です。昔と比べ、日本では近頃、庭が先にあり、それを観るために建物がある例も増えています。西洋では建築が先で庭が後との印象が今でもありますが、中国のテーマパークなどでも人工的に木陰を造るなど、特に東洋やアジアにおける特殊な傾向のような気がしています。

そうですね。建築家は周囲の環境や地形を考慮することなしに建築することなんてできません。もっと言えば、今後、アーキテクトはランドスケープアーキテクトに寄っていくと思うし、10年後くらいには両者の境目もなくなるような気がしています。昔の日本人は家を立てるとき、予算や敷地の3割は庭に使ったと言われていますが、実際にはそんなことはなく建蔽率ギリギリまで建物を建てるのが一般的でした。でも今は、庭をつくるためにセットバックしたり、元々生えている木を活かしてデザインするといった状況になりつつある。いい時代になってきたなと思っています。

——昔から大工は森に入って木を選びますが、森で生えていた向きで製材するし、山の北側にあった木は建築でも北側に使い、南側の木は南側に使うなど、森の秩序をそのまま建築に置き換えていた。建築の心は森をつくる心につながると思います。昔の棟梁たちは庭や植物、自然が先あって建築はそのあと、森から命をもらおうといった謙虚な気持ちで建築をしていたように思います。

そうですね。皆さんに想像してほしいのですが、毎朝、家から出で最初に見る木は何でしょう？ または、最寄り駅に生えている木は何か覚えていますか？ 見ているはずなのに覚えていません。ブティックや美味しいパンケーキ屋は覚えているのに……。それは「植物のモノゴコロ」がついていないからだと思うんです。もし、モノゴコロがあれば、「この木のおかげで夏は日陰ができて助かる」とか思うはずなんです。行政や建築家たちにもっとモノゴコロがつけば、街はもっと変わると思います。シンガポールやメキシコは建物より木のほうが大きいので街が優しく見えます。でも、日本の場合は建物が大きく競い合っている感じなので街が滑稽に見えてしまう。街路樹は建物の美しさをつなぐもの。黒川さんのような建築家が多数派になれば、日本の景色も変わると思います。

——海外から植物を日本にたくさん持ってこられていますが、木は「日本には行きたくない」と泣いていないですか？

皆さん、どう思いますか？ 実は木は遠くに行きたいと思っています。分かりやすい例では、果実を甘くするのは鳥や小動物に食べさせて遠くに運んでもらいたいから。ただ子孫を残したければ、真下に種を落とせばいいだけです。タンポポやサボテンのように、種に羽根をつけて飛ばす方法もあります。ヤシの実は何年も海を漂流しても大丈夫のように硬い皮を

身に付けました。植物は遠くに行きたがっているんです。

——それはよかった。プラントハンターだから、逆に植物に恨まれるとか呪い殺されるとか、そういうことはないんですね（笑）。

大丈夫です。むしろ、植物が僕を利用しているんです。今日はありがとうございました。

以上

2016 年度第 1 回物学研究会レポート
「植物がもたらす、次世代への可能性」

西畠清順 氏
(プラントハンター)

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局
文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2016 BUTSUGAKU Research Institute.